

第5回

分け入っても分け入っても書類の山 ——でも大事な書類はない？

あお くに まさ やす
青谷正妥

京都大学留学生センター

出張から帰ってくると、机の上に「至急!」「緊急!」と書かれた“重要”書類が山積していることがよくあります。こういうときの最良の策は、下手にその山に触れないこと。地すべりが起こらないように、そうっと机の片隅に積んでおきます。十分な時間がたてば、もはや遅すぎて書く意味もなくなるという魔法の処理法。「時間が解決するって言ってそのまま♪ 見てみぬふりしてるならこのまま♪」(『Viva La Revolution』, Dragon Ash), あれです。

しかし、大学院出願にDragon Ash 法は禁物。計画的かつ組織的に書類を処理していかなばなりません。入学試験はなく、すべてが書類選考であるうえ、外国人としてアメリカの大学院に入学するのですから、書類が多いのは当然ですね。ちなみに、最近は簡素化に努めているようですが、アメリカ人が日本に留学する際の書類の多さは、日本人のアメリカ留学の比ではないそうですよ。

必要書類はたくさんある

大学により多少違う場合もありますが、典型的な必要書類は、1) 願書 (application form), 2) 成績証明書 (transcripts), 3) 推薦状 (letters of recommendation/reference), 4) 出願理由書・エッセイ (statement of purpose/essay), 5) テスト結果 (test score reports) などです。では、それらを順次見ていきましょう。

1) 願書 (application form)

アメリカでは、大学全体で願書のコアの部分が共通書類と

して統一され、各研究科で必要な場合に追加書類を要求するという形が多く見られます。ここでいう application form はその共通書類で、個人情報や志望研究科などを含む標準的な願書です。各大学には所定の用紙があって、昔は「タイプすべきだが手書きしかできないなら活字体で書くこと」などの注意書きがあったものですが、最近の major な大学はたいてい on-line による願書提出を希望しています。各志願者に ID と password が与えられ、途中まで書いた願書はそのままデータが保存されますので、次回は続きから書くことができます。最終提出までに書き直しもできますし、抜けている項目を自動的にチェックしてくれたり、たいへん便利です。

なお、ほとんどの大学では申請料や検定料として100ドル程度までを課しています。クレジットカードで払えます。

2) 成績証明書 (transcripts)

いうまでもなく、英文の正式なものを大学に依頼し、直接志望校へ送ってもらいます。その際に、大学の印か公式の seal (アメリカなどの慣習に合わせて大学がそういうものをもっている場合)、さらに研究科長や学長など発行者の署名(手書き風の印刷でもよい)がついていれば、アメリカの慣習に則しているという意味では完璧です。ただし、基本的には公式のものでさえあればよいので、これにこだわりすぎないようにしてください。また、成績証明書は2通以上を要求されることもあるので、志望校の指示を十分確認してください。送り先も、全体を統括する Graduate Admissions などのオフィスである場合と、志望研究科である場合があるので注

意しましょう。

ところで、日本人の弱点の一つが平均成績です。Caltechのようにアメリカ人だけにGPA (grade point average) を計算させるところもありますが、GPA うんぬんにかかわらず学部が重要になってくるので、興味のある科目をドンドン取って、単位数は卒業単位をはるかに超えているが平均成績はよくないというような日本人には辛いところです。留学を希望するのであれば、GPA が高く保てるようにふだんから努める以外に対策はありません。

3) 推薦状 (letters of recommendation/reference)

指導教官など、自分をよく知っている人物に依頼します。最近ではe-mail や on-line でだったり、Web site にアクセスしてuploadしてもらったりと、やり方もいろいろですが、昔ながらの郵送形式も基本的には健在のようです。Application form と同じで各大学に一定の様式があり、それに書き込んでもらうこととなります。通常2~3通を求められるので、今から推薦者の人選と根回しなどを始めておく必要があるでしょう。内容については大学によってかなりの開きがあり、ほとんど多肢選択のみのようなものから、自由コメントも求めたうえで足りなければほかの紙を付け足してよいという学校まで多様ですが、標準メニューとしては、出願者との関係、成績、専門分野での研究能力、論理的思考力や創造性、積極性・協調性といった人間像などです。

資質・能力や人間性を客観的かつ具体的に評価してもらうのが目的で、たとえば「これまで指導した学生のなかで上位何% にいましたか」など、本当に具体的な質問があります。

4) 出願理由書・エッセイ (statement of purpose/essay)

出願理由とプログラムの整合性を見たり、併願者がほとんどを占める状況のなかで出願先への興味の程度を量ったり、人物評価に利用されたりします。原則は自由作文ですが、志望理由、興味のある分野、過去の実績・成績、資質や能力、将来計画、特記事項などを簡潔に書くようにとの指示が付いているのが普通です。自分を見つめ直し、留学の目的を明確化するのにも役立ちますので、留学の1年前から、あらずじくらは書いてみるのがよいと思います。ネイティブチェックは肝要でしょう。



急速に進む on-line 化

英語音痴のうえに computer 音痴の日本人が気づかぬうちに、願書提出は今や on-line が主流。UC Berkeley のように “There are two ways to apply (on-line と紙の2種類がありますよ)” と優しくいつてくれるのは例外で、Web 希望 (preferred method, encouraged) とははっきりいうMIT, Princeton, Harvard, 「on-line でできない人は理由書添付のうえ、紙の書類の送付手数料 20 ドルを添えて下記に連絡下さい」と、さすがはハイテク Silicon Valley のど真んなかと感心させるStanford, 「100% on-line です。なんらかの理由で on-line がうまくいかないときは、ここに電話を下さい」と見かけは親切だが blacklisting がちょっと怖い Caltech など、on-line 化の進行・侵攻は明らかです。

「おお怖い!」と思いながら、試しに Caltech の on-line application を覗いてみると、「成績表は scanner にかけてここにファイルを upload 下さい。ファイルフォーマットはこれかこれです」とでてきました。書かれてはいいませんが、「Caltech に来たいなら、こんなことくらいできるでしょう? いつもやってるものね!」と出願前から期待にあふれた厳しい愛の鞭…。参りました。

5) テスト結果 (score reports)

TOEFL や GRE (Graduate Record Examination) のスコアをテスト機関から大学へ直送してもらいます。TSE (Test of Spoken English) という話す力の試験が別に要求される場合もあります。



とくに大切な書類

逆説的にいうと、とくに大切な書類というのはありません。総合判断なので、どの書類もそれなりにすべて大切だからです。しかし、日本人には馴染みが薄く慣れていないという意味で、推薦状と出願理由書が “取扱注意” です。「推薦状なら日本にもあるじゃないか」といわれてしまいそうですが、アメリカのそれはまったく違います。そういうわけで、今回は圧倒的影響力をもつ推薦状のお話です。乞う、ご期待。

「お行きなさい」。